

関東鉄道常総線沿線における地域公共交通活性化・再生総合事業

事業期間
20～22年度

「常総線を利用しやすくすること」「常総線による都心へのアクセスを向上させること」により、鉄道駅周辺を中心とする常総地域の活性化を目指す。

【常総線活性化支援協議会】

茨城県、下妻市、常総市、取手市、守谷市、坂東市、筑西市、つくばみらい市、八千代町、関係商工会・商工会議所の代表者、利用者代表、関東鉄道

事業の概要(20年度)

※数字は事業費

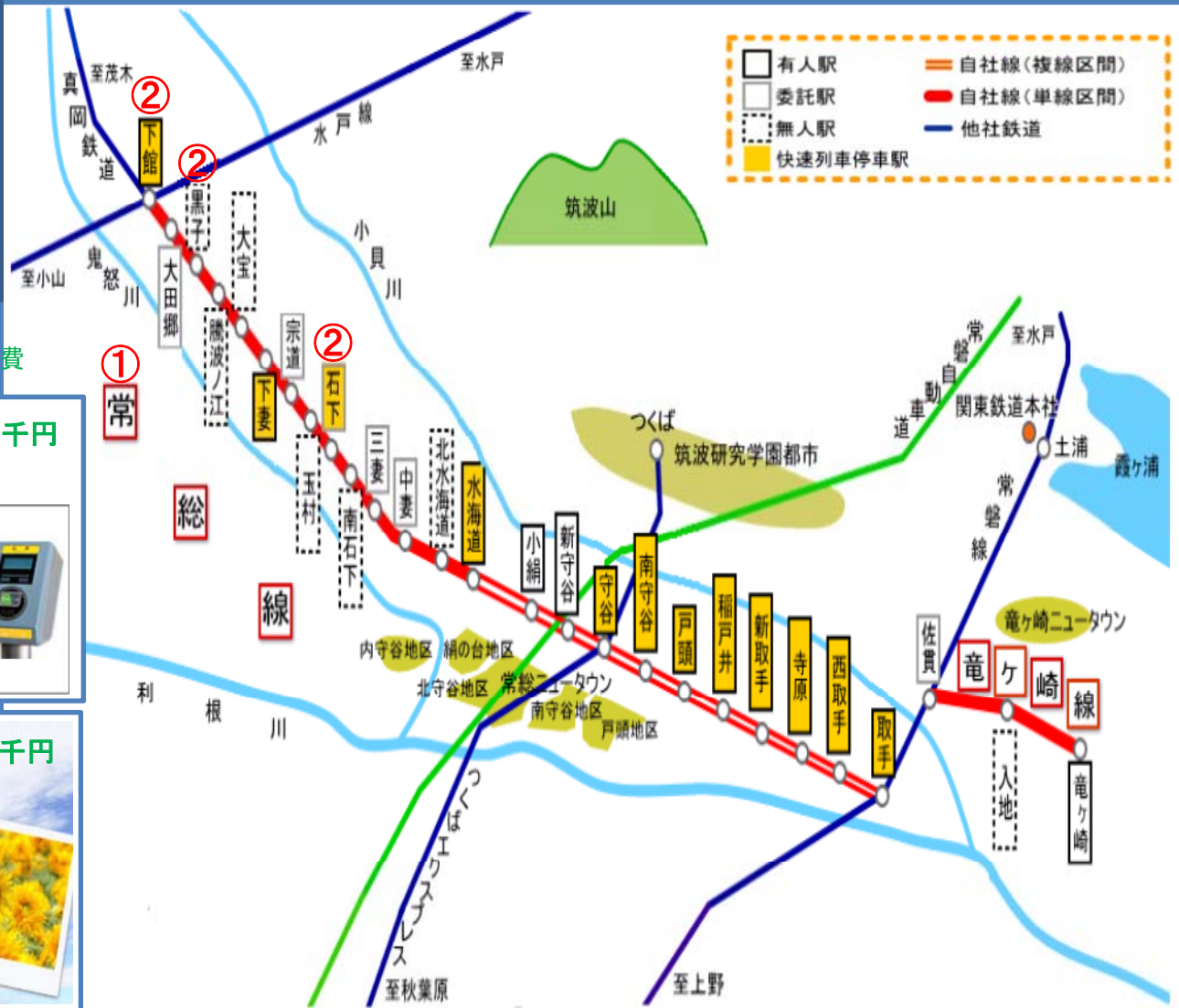
①ICカード乗車券の導入 510,000千円 (常総線全駅)



②利用促進イベントの開催 1,026千円 ウォーキング大会の開催

駅からウォーク夏

ひまわり畑から望む筑波山と
明野温泉で湯ったりの道



導入 への プロセス

常総線は、茨城県から都心へ向かう常磐線とつくばエクスプレス線乗り継ぎ利用者が多いが、高度な運行形態・設備を有する2路線に対し設備整備が遅れていた。そこで、運行面・設備面のシームレス化を図り、利用しやすく、また、都心へのアクセスを向上させるため、ICカードシステム導入、快速列車の導入、ダイヤ改正による接続改善等を盛り込んだ連携計画を策定。

PASMOセンターとの接続を行うサーバ(利用データや収入の管理用)を京成グループ5社(京成電鉄、新京成電鉄、北総鉄道、舞浜リゾートライン、関東鉄道)で共有することにより初期投資額と導入後のランニングコストを削減できた。

| | | |
|--------|--------------|-------------------|
| 削減の概算額 | 社局・駅サーバ | 約100,000千円⇒0千円 |
| | サーバ類ランニングコスト | 約50,000千円⇒6,600千円 |

初年度 の効果

ICカード利用率の増

駅→ICカード利用率がシステム導入当初(H21. 4月)40%からH21.12月時点で57%と伸びており(75千人の増)、一定の効果があった。

| 4月輸送人員(単位:千人) | | | |
|---------------|-------|-------|-------|
| | トータル | うちIC | IC利用率 |
| 定期 | 619.6 | 277.7 | 44.8% |
| 定期外 | 370.5 | 123.1 | 33.2% |
| 合計 | 990.1 | 400.8 | 40.5% |



| 12月輸送人員(単位:千人) | | | |
|----------------|-------|-------|-------|
| | トータル | うちIC | IC利用率 |
| 定期 | 476.2 | 323.5 | 67.9% |
| 定期外 | 357 | 152.3 | 42.7% |
| 合計 | 833.2 | 475.8 | 57.1% |

地域との連携による利用促進

地域と連携した利用促進策として、
 ○沿線自治体広報誌での常総線PR活動
 ○筑波大学と連携して、ニュースレター「常総線通信」の発行を行い地域の情報、ICカードの紹介
 ○常総線水海道駅前を地元商工会に開放し、物産市を月1回開催する等駅前広場の有効活用
 などを行った。

次年度 以降

PRの強化等により一層の利用促進に努める。

常総線は、長距離乗車利用及びTX線と乗り継ぎ企画割引乗車券が定着しており、定期外のIC利用率が低迷しているのが実態。

企画乗車券をICカード化すれば、定期外ICの利用促進は図れるが、莫大な設備投資がかかるため、沿線高校へのPR活動やICカード購入者にノベルティグッズをプレゼントするなどといったソフト面でのIC化率向上施策を推進しており、今後も引き続き取り組んでいく。

利用促進イベントとして、H20.8・11月、H21.3月の計3回、駅を発着点とするウォーキング大会を開催。毎回、沿線各地の名所を巡るコースを設定して行われたが、想定参加人員延べ900名に対し524名の参加に止まった。

原因は、天候の影響及びPR不足にあると思われる、翌年度以降はPRの強化を図るとともに、多様なイベントを実施回数や場所を増やして行う等見直しを図っていく。